

草筆木筆で描く不思議のらんたち

# 草画帖 36



春  
草  
号



春草号です。  
表紙はワラビ、  
号名はフタリシズカ筆。  
写真はキンポウゲです。

万願寺川といふ春流れたり

山頭火に縁なき道もきんぼうげ

どこまでも続く草萌線路かな



ツルニチニチソウ筆。草人の、草心、草魂、草情…



ハナニラ筆。青花。  
さへづりや羅漢の千の耳ひらく



ヒメオドリコソウ筆。寂かにいても、春はこころが踊る。



キンボウゲ筆。

あるけばきんぼうげすわればきんぼうげ 山頭火

花鼓

花が騒ぐ

雪代の

山河

かつ咲き

かつ散り

蕩々と虚空は渡る

古人偲べば

胸に満月鳴り止まぬ



草鼓

草が騒ぐ

タンポポ

ノゲシ

オニタビラコ

絮を飛ばして

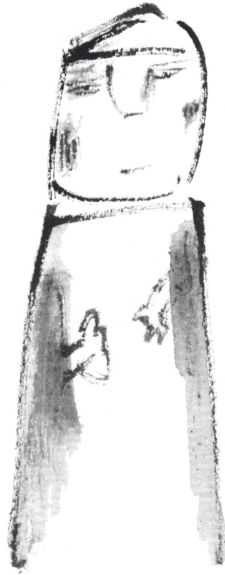
四月の、啄木

木歩

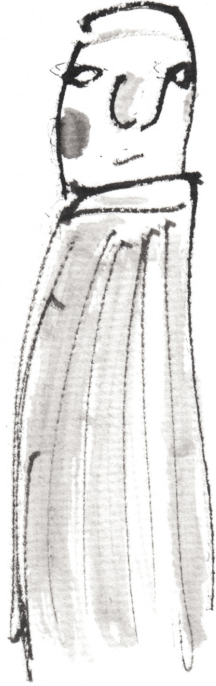
胸に片雲鳴り止まぬ



ヒナゲシ筆。印も。虞美人草が芥子坊主を生む。



ミヤコワスレ筆。今出川夢入ル辺り…。



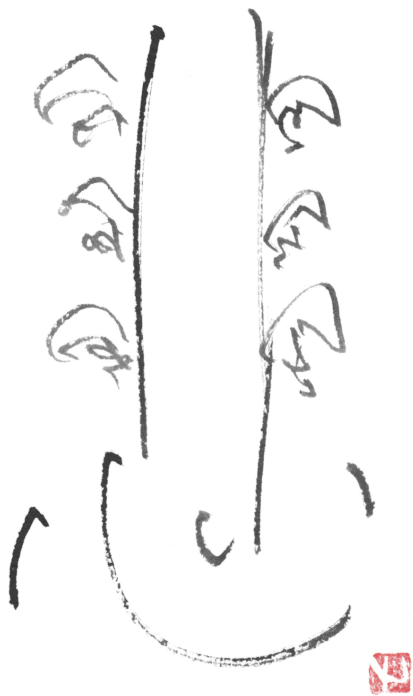
カラス



カラスノエンドウ筆。白花。白い闇もある。白い虹もある。



スズメノヤリ筆。春は小草の季節。微人、微星の季節。



オドリコソウ（白花）で書いた「悲」の字。

## 草話

春の草木のリズム。まさしく弥生。百花百草が次々に芽ぶき、つばみ、花が咲く、このアップテンポに同調できたことはない。たけなわでいつも置いてけぼりを食う。温暖化で春と秋が短く畳まれて、その分推移が速い。春を堪能するのは年々難しくなった。

\*

それでも草木との出会いは多い。のんびりしたくても、嬉しさにつついっぺんにして絵を描く。初めてのもあり、一年ぶりの再会もある。この春は裏庭で山吹が黄色の、草画が一万枚になる朝に白山吹が白い花を初めて着けた。

\*

筆草と呼ばれた草も新しく一つ識った。辞書では、弘法筆と土筆のことをいう、と述べてある。翁草が花を了えて白髪を吹く前は見事な筆姿で、こどもはこれで遊んだと民俗学者は語っている。今回識ったのは、イネ科の雀の鉄砲。

\*

筆草と称されると、描く時の心持ちも違ってくる。調べてみるとまだ筆の名を持つ草はある。筆竜胆、紅筆草、絵筆菊。雪の筆は白糸草のこと、九輪雪筆はタデの一種。沖繩にはアダンの気根や果実で作る筆が昔からあるという。

唐辛子を見ると描きたくなるのは、別称筆唐辛子とあるので納得、その内筆柿などでも描いてみたいと思っっている。



ヒナゲシ印

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第36号 2021年4月23日 泉井小太郎編集 六角文庫発行  
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008